

## 考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（４）

### 平瓦・丸瓦からみた造瓦工房

（梶原 1999「7世紀における造瓦組織の発展」『史林』82-6）

#### はじめに

本論の最終的な目的→律令期の地方造瓦組織についての総合的復原

それを生み出すにあたっての母体となる、  
7世紀段階の造瓦組織は、どのようなものであったのか？

7世紀後葉における地方寺院の激増に、互生産はどのように対応していったのか？  
工人の動向（瓦窯における工人編成とその変化）を、平瓦の分析から復原していく。

#### なぜ平瓦なのか？

#### 研究史

窯における工人編成に関する研究は、さほど多くない。

五十川伸矢氏・木立雅朗氏の見解（丹波周山窯の研究成果より）

- ・周山窯の出土平瓦の型式数は、後に操業を開始した窯ほど増加しているという結果

↓

- ・操業開始後、徐々に製作者を増加させて「瓦屋」の充実を計り、さらに、最初から最後まで生産を継続する型式については、その製作者は造瓦組織全体の「長」的存在。

#### 研究史の問題点と本論の目的

- ・周山窯の分析結果に対する疑問：

たしか後になるほど出土型式数は増えているが、その出土点数については、大きなばらつきがみられるという事実。

↓

灰原出土瓦は、すべてがその窯の生産瓦とは限らず、窯体使用瓦や、また先に生産された瓦が混入した可能性も。

- ・本論では、出土割合を重視しつつ、他のいくつかの窯についても平瓦の型式分類と数量分析をおこなうことで、従来説とは異なった瓦窯の操業形態を復原。

さらに、7世紀前葉・中葉の窯についても分析し、7世紀全体を通じた造瓦組織のあり方の復原をめざす。

## 資料の分析

### I 7世紀後葉の諸窯

周山窯を代表とする、7世紀後半期の瓦窯の平瓦を再検討し、工人のあり方を復原。

#### ① 周山窯（京都府京北町）

五十川氏の5型式分類は妥当であり、そのまま5つの工人単位と考えてよい。

操業の復原であるが、4・3号窯の操業時にはⅠ型式が100%であったが、2号窯になると、Ⅰ型式は一気に2割前後まで割合を減じる。

↓

2号窯で、Ⅰ・Ⅱの2単位の工人が瓦生産をおこなったのなら、もっとおなじ割合に近くなるはずでは？

1号窯1次操業になるとさらに、Ⅲ型式のみが8割を占め、Ⅰ・Ⅱ型式は僅少。

これらにことから、出土割合を考慮した上で復原できる周山窯の操業形態として、4・3号窯（工人Ⅰ）、2号窯（工人Ⅱ）、1号窯（工人Ⅲ～Ⅴ）は、それぞれ重複せず、別個に窯場を訪れ、造瓦のピークごとに生産をおこなったと考えられる。

↓

このような生産体制を本論では、「**工房断続型**」と呼ぶ。

#### ② 三ツ塚天神窯（兵庫県市島町）

1・2・4号窯の3つの窯で瓦生産をおこなう。

3つの型式の瓦が出土しているが、1号窯と2・4号窯では、窯の床面出土の瓦の型式が、それぞれ異なる結果に。

最低2つ（ないしは3つ）の瓦工人が、別の時期に窯を違って瓦生産をおこなう「**工房断続型**」の生産体制。

#### ③ 天狗沢瓦窯（山梨県敷島町）

2型式（C型式はA・Bのいずれかが摩耗したものと考えられる）の瓦が、3つの窯で、わずかの重複を含みつつ、別個に生産されている→「**工房断続型**」

## Ⅱ 7世紀前葉の中央の窯

それでは、このような「工房断続型」の操業形態は、すべての窯にあてはまるのか？  
時期と地方を変えてみていく。

隼上り窯（京都府宇治市）：大和豊浦寺などにも瓦を供給する、当時の基幹的な窯。

出土瓦は4型式に分類でき、とくに側面調整法の違いなどから、それぞれ別個の工人  
単位である可能性が非常に高いことがわかる。

1・2号窯と3号窯でのそれぞれの型式の出土割合を調べたところ、Ⅳ型式（灰原の  
ごく一部でのみ出土。軒丸瓦D型式と対応し、特定の時期のみに生産されたと考えられる）  
を除き、3つの型式はそれぞれで一定の出土をみることがわかった。



隼上り窯においては、操業期間を通して、複数の工人単位が継続して瓦生産に携わった  
可能性が高い。



このような生産体制を本論では「**工房継続型**」と呼ぶ。

## Ⅲ その他の操業形態

梶原瓦窯（大阪府高槻市）：7世紀中葉～8世紀。

『正倉院文書』にも登場する「梶原寺」の瓦窯。

出土平瓦は、9型式に分類。

窯ごとの出土状況は複雑であり、

- ① 最初に操業を開始した2号窯では、Ⅰ型式のみが出土。
- ② 次の5号窯では、Ⅰ型式はまったく出土せず、Ⅱ～Ⅷ型式が出土。
- ③ 1・3号窯では、Ⅱ型式が姿を消し、多寡はあるもののⅢ～Ⅷ型式が出土。
- ④ 4号窯（8世紀中葉の平窯）では、一枚作りのⅨ型式が7割近い。

これらのことから、梶原瓦窯の操業形態を復原すると、

- ① 2・5号窯を築いた工人Ⅰ・Ⅱは、窯場に定着せず、操業開始時は「工房断続型」。
- ② 1号窯の操業開始とともに、複数の工人単位が複数の窯をもちいて操業。工人Ⅲ  
（木立氏の言う「長」的工人か）を基本に、工人単位数を増やしつつ操業。

→本論では「**工房継続・拡充型**」と呼ぶ

#### IV 工人単位の詳細像について

工人単位＝瓦から細分可能な最低単位の工人集団。他との行き来がない工人のまとまり。  
その規模はどのくらいのものなのか？

三ツ塚天神窯 1・2号窯：1つの窯で使用された叩き板は、おそらく1枚

→叩きの工程に携わったのは、1人の工人。

1工人単位内で複数の桶型を使用していたことを支持できる積極的な根拠はない。

花谷浩氏の山田寺回廊出土軒平瓦の分析：回廊出土軒平瓦は、1つの桶型で製作。

ましてや地方寺院において、ひとつの寺院・堂塔を建てるのにあたって、瓦製作に従事した工人数は、それほど多くなかったと考えられる。

#### 考察—7世紀における造瓦体制の復原—

それでは、この分析結果から、どのようなことがわかるのか？

分析結果からの結論：

- ① 7世紀後葉の地方造瓦組織：多くは「工房断続型」。寺に近接して瓦窯を構築。
- ② 7世紀前葉の中央の窯：「工房継続型」による。多くは遠隔地操業。
- ③ 7世紀後葉の一部の窯：「工房継続（・拡充）型」工房。

7世紀後葉の2つの操業体制について：

「拠点窯」と「周辺窯」という解釈。

- ・南山城の高麗寺系工人（菱田哲郎氏）
- ・北山城の北白川廃寺系工人（網伸也氏）
- ・備中の秦原廃寺系工人（妹尾周三氏）
- ・南近江の南滋賀廃寺系工人（北村圭弘氏）

など、軒瓦の分析から復原される、小地域での拠点寺院方式での工人管理のあり方が、7世紀後半の地方窯では普遍的で、本論の2つの操業体制も、それに該当するのでは。

そのような寺院単位ではなく、拠点単位での工人の管理が、ひいてはその後の藤原宮造瓦に、地方工人を有効活用していくにあたっての母体となったとも考えられる。

→中央における、造瓦技術の地方への扶植のあり方